ぴあじぇ～る 情報交換会

一個人の「心身の基礎」を培う

保育園における「幼児教育」への取り組み

早春の3月24日午後、大阪府寝屋川市にある寝屋保育園で「増美保育園」園長の鈴木晶夫先生、「なあもの森保育園」園長の田原慎也先生、「寝屋保育園」園長の田中恵美先生と、日本幼年教育会研究部講師の中村真理子先生の4人の先生方に〝保育園における「幼児教育」への取り組み〟について、話し合っていただきました。

鈴木　増美保育園では、子ども達がいろんな経験を通して達成感を感じながら育ち、自己信頼というか、「自分はできる」という気持ちを持って卒園していただきたい、という想いで取り組んでいます。

　実は私、園長になる前はハウスメーカーの営業職でした。保育園に入った時点では、保育園側の都合に合わせた保育が優先されているなと感じた部分もありました。そこで、保護者や地域の方々から見てもおかしくない、子どもの立場に立った保育活動を目指しています。

田原　なあもの森保育園は平成23年に開園したばかりですが、「明日も行きたい保育園」をモットーに掲げています。例えば保育園の給食では、これを食べるとどんな栄養が得られるというゴールを決めて栄養計算を行いますが、「嫌いだから」と食べ残してしまえば机上の空論になってしまいます。それと同じで、いろんな保育活動で身に付けてほしい力を設定しても、子ども達が「そんなの楽しくないよ」と思ってしまったら意味がありません。まず「楽しい」とか「ワクワク感」を引き出すことが、子ども達が力を付けていくきっかけになると思っています。

中村　保育園は子どもの生活を支える場として環境を整えています。だから、保護者の方が安心してお子さんを預けてくださるのですよね。どの園も特性や保育理念に合わせて子どもが伸び伸びと成長できるように、という想いが共通されていますね。

　そして、成長の目標を見据えながら子どもに関わっていき、子どもが楽しいと思ってチャレンジできるよう取り組まれている姿勢は、幼児教育の一番大事な根底だと感じます。

まず「楽しい」とか「ワクワク感」を引き出すことが、子ども達がほんとうに力を付けていくきっかけになると思っています

田中　寝屋保育園では、人と人との〝きずな〟を大切に、「子育てって楽しいですよ」と園から家庭へ、地域へ伝え、皆さんと一緒に子育てを楽しむ保育活動を行っています。私自身今現在、保護者の皆様と同じ子育ての真っただ中でございますが、一貫して子どもの成長には保育園とご家庭と地域が一体感を持って子育てに取り組むことが大切だと感じて、保育に取り組んでいます。

田中　私は以前、子ども達にクラシックバレエの指導をしていました。保育の指導でもバレエと同じように、子どもの「やりたい」と思う意欲、「できた、またやってみよう」という達成感、そして「自分って大切なんだ」という自己肯定感をどう育んでいくかが重要ですね。そこで、「子ども達が楽しい、またやりたい」と思えるために、私たち保育士が「私たちが楽しいと思える取り組みを子ども達と一緒にやろうね」と話し合って取り組んだ結果、職員同士のチームワークも良くなり園の日常活動がうまく回り、変わってきました。

鈴木　やはり、職員全員が保育理念を共有することが大切だと思います。例えば散歩でも、ただ漠然とお散歩するのではなく風の温かさや冷たさを感じたり、花が咲いているのに気づかせたりして、普段の保育を丁寧に行っていくこと。先生方が一つのチームとなり組織で目標に向かって機能していくこと。

　保育理念の共有は当園ではまだ浸透していませんが、こうした日々の発見と勉強の連続が大切だと思っています。

田原　たしかに散歩でも、目的は時間通りに目的地にたどり着くことじゃない。立ち止まって道端の花に何かを感じている子をせかすのではなく、共感することが大事です。

　私はもともと大型機械の設計をやっていて、幼児教育が何かも知らずに、幼稚園の職場に入りました。最初驚いたのは、それまで子どもって未熟な存在だと思っていたのに、先生達は「イヤだ」と言っている子どもにそばに腰をかがめ、子どもと同じ目線で「どうして?」と話している。「あ、ひとりの人間として対話することが大事なのだ」、と気づいて衝撃を受けました。

その子の発達の過程を見ながら成長を手助けするよう、職員間で方針を共有しています

田中　子ども達は、ほめられると「うれしい。またやってみよう」という気持ちになります。0・1歳クラスで生後数カ月のお子さんでもお片付けの時、保育士が「できたね」と言うとにこっと笑ってくれるようになるのです。2歳児の「イヤイヤ」の時期で何を言っても駄目な場合でも、少し時間を置いて子どもが落ち着いてから「すごいね!できたね!」と言ったりして、その子の発達の過程に見合った手助けをするよう、ミーティングを通して職員間で共有しています。

鈴木　我々の園では、楽しい思いもちょっと辛い思いも経験させたいと思います。例えばおもちゃの取り合いが始まると先生方が間に入り双方の言い分を聞きながら、子ども達それぞれが相手を理解して「自分の思うようにならない」ことがあると気づいてもらうきっかけとしています。手間がかかるのですが、いつかその言葉掛けが自然と実を結ぶ時期があるのではないかと思います。

社会福祉法人川越福祉会
増美保育園（埼玉県川越市）
園長 **鈴木 晶夫** 先生

日本幼年教育会研究部講師・
四国大学短期大学部准教授
中村 真理子 先生

会福祉法人大阪誠昭会
屋保育園（大阪府寝屋川市）
長 **田中 恵美** 先生

認定こども園みちび樹
なあもの森保育園（鹿児島県薩摩川内市）
園長 **田原 慎也** 先生

保育士が「楽しい!」と思える取り組みを子ども達と一緒に

あそびの中から学ぶ力をつけ、
“楽しい保育”を引きだします。

日常の生活習慣を身に付ける中に幼児教育の原形があると考えています

田中　当園では保育所保育指針に基づいた保育を行っています。日常の生活習慣を身につける中に幼児教育の原形があると考え、保育士が家庭と子どもと一緒になって、子ども同士のやり取りを見守り、日常生活と会話の中でその子の発達の課題を見つけて、自分の心が表現できるよう取り組んでいます。例えば、絵本を保護者の方々に、「かならずお家の人が声をだして読んであげてください」とお伝えし貸し出しています。「お空って青いね」とか「緑っていろんな色があるね」とか会話して、絵本の中からたくさんの事柄を学んでいきますね。

田原　絵本は保育者（読み手）の経験や知識に偏らない世界を楽しめる面白さがありますね。多くの絵本を読み聞かせることで子ども達が未体験で知らない世界に気づく。と同時に、絵と絵の間でいろんなイメージをふくらませていきますね。

なあもの森保育園は川内幼稚園の敷地内にあり、0歳から2歳が保育園舎、3歳からは幼稚園舎で過ごしています。そのため、幼稚園の3歳児クラスには新入園児だけでなく、保育園や2歳児クラスからの進級児も多くいます。集団生活に慣れた子の様子を見て、「自分もやってみよう」と思うことや、できる子が手助けしてあげるなど良い循環ができています。幼稚園とも今まで積み上げてきた成長をどう活かして育てていくか話し合って運営を進めています。

園から家庭へ、地域へ、“きずな”を大切に
保育活動を行っています。

鈴木　よく「保育の質」と言われますが、それは、保育園の保育理念が現場に活かされているかどうかではないでしょうか。体操指導や美術体験に取り組んでいますが、美術の場合なら「達成感」にしても、作品を仕上げることよりも、「色と色とが混ざりあってこんな色になる」とか「一つ一つの素材の積み重ねが新しい形になっていく」といった驚きや感動を実感できるよう心がけています。創立の理念を大事に現場に生かしていきたい。ただ、偏っているのでは？自己満足になっているのでは？という懸念もあり常に振り返り、反省の毎日です。

楽しい保育を実現するには、子どもと会話することが基本。言葉掛けには気を配っています。

田中　私達の園では人から何かしてもらった時に「ありがとう」と感謝の気持ちを言葉で表そうね、と伝えています。思いやりや感謝の気持ちはみんな持っていても、相手に伝えた時点で初めてコミュニケーションが生まれます。それと「考える力」を身に付けてもらうために、どう考えたかを子ども達に深く聞いて、「そうだったの。すごく良いね」と言葉掛けしています。

鈴木　思いやりと言えば、年長クラスに発達に気掛かりなお子さんがおられたのですが、子ども達はその子に合ったルールを作って遊んでいて、子ども同士で思いやりのあるルールを作って遊ぶという発見をしました。

田原　「楽しい保育」を引き出す前提として遊び方をみんながよく聞いて理解し、ルールを守って自分の役割をきちんと果たさないと「楽しい」は生まれなくて、やはり、あそびの中から学んでいくことって多いですね。

子ども達に多くの体験、経験をしてもらいたい。保育環境の設定はとても大事だなと思います

田中　園では0歳児クラスからネイティブの先生が来て英語に触れたり、音って楽しい、爽快感がある、と教える音楽活動をしています。また、園の方針の一つに「考える力をつける」を掲げていて、3歳児が「スタートシリーズ」、4、5歳児が「めざましあそび」を使っています。それは日本幼年教育会指定教材ですが、実際は子ども達にとって大好きな「あそびの環境のひとつ」で、いろんな教材あそびの中から自然に論理的な思考を育んでいます。そしてみんなの前で発表することで自己表現できるようにもなっていきます。

鈴木　保育園でも幼稚園と同じように、子ども達に多くの体験、経験をしてもらいたいと思います。特に年齢に応じた環境設定が大事で、環境のひとつである「あそびとして活用できる教材」の役割は良く理解できます。

田原　教材も上手く活用することが大事だと思います。決まった順序でこなすのではなく、子どもが課題を自分に引き付け、主体的にアプローチしていく力を身に付けるために、先生方がどのように取り組んでいくかが大切ですね。

いろんな経験を通して「自分はできる」
という気持ちを持てる保育活動を。

中村　保育者は教えるのではなく、子どもが興味、関心が湧く対象を提供して、一緒にやってみて、できたことを認め、ほめてあげる。もし違っていたら、ヒントを与えて子ども達が自己修正できるようにサポートする。失敗し自己修正することから学ぶことがすごく大切です。ですから、「間違っているよ」ではなく、「もう少し違うやり方、考え方はないかな？」「ここまでできたね。次はどうしよう？」と、子ども達が思考過程を順次たどり成長していくように保育をデザインできればいいですね。

田中　子どもは未来を担う純粋な原石です。子どもには、子どもとしてではなく一個人として対応し、やっていいこと、いけないこと、しっかりと生きていくために身に付けることを指導していくよう心がけています。でも、子ども達の私達を観察する力は鋭くて逆に毎日教えられることがいっぱいあります。

中村　保育園と家庭が一体となって、子どもが0～3歳までに基本的な生活習慣が身に付くようたくさんの経験をさせてあげて、3～5歳・就学前の間に視野と社会が広がり、判断する基盤がしっかりと作られていくのです。この0～6歳までの流れで子どもと関わっていく大切さを感じます。だから、日常生活で対応する身近な活動こそ、幼児の成長にとってもっとも有効な教育内容なのでしょうね。

幼稚園教諭や保育士の仕事は、子ども一人ひとりの成長に関わり、保護者に伝え、歩調を合わせて子どもと三人四脚で子どもを明日へ繋げる大切な仕事ですね。

ワクワク感を引き出し“明日も行きたい
保育園”をめざします。